



村上茶が誕生してから 400年目を迎えます



輸出用の桐の茶箱

村上茶の歴史は古く、産業となつたのは江戸初期だと伝えられています。

誰によって持ち込まれたかは諸説ありますが、村上町大年寄を務めていた徳光屋覚左衛門が伊勢神宮参拜の際、茶の種子を宇治から持ち帰り植えたのが始まりという説や、村上城主の堀直奇が江戸駒込の藩邸で栽培されていた茶の種子を村上に初めて移植したのが始まりという説もあります。両氏とも同じ時代を生きた人物であり、今では直奇が種子を移植し、徳光屋覚左衛門が栽培し産業になったと言われています。いずれにしても同じ頃、村上にお茶の種が伝えられたことになり、今年で400年を迎えることとなります。

村上茶の作付面積や収量は、明治後期から大正にかけてが最も多く、かつては東京ドーム126個分ほどの面積を有していました。この時代、村上茶は海外にも輸出されるようになり、アメリカやロシアへお茶や種子が輸出されました。



昭和の初めのころの写真



輸出用に造られたお茶のレッテル



村上製茶会社のレッテル



右上：村上町（村上製茶会社周辺）の茶畑分布絵図（大正時代）

右：茶札は小切手のように扱われ、米屋などに持っていけば物が買えました。また、茶札を出したお茶屋に行けば現金化もできました。



茶札 お茶屋の印に金額を書いた紙か木の板のことを「茶札」といいました。



明治18年には、日本郵船の商船を瀬波まで回航させてお茶の輸出を行うほど、村上から多くのお茶が他国へ渡ったようです。

また、アメリカでは一時、緑茶と紅茶が競争し合った時期がありましたが、紅茶が次第に優勢となったことを受けて、村上でも明治11年に設立した「村上製茶会社」において紅茶の製法を学び、紅茶の生産と輸出を行ったこともありました。

戦後、茶畑の転用や宅地造成などにより、次第に茶畑の面積は少なくなりましたが、今でも青々とした茶

樹の畝は、私たちの日常にある光景であり、村上茶は地元が誇る産業です。

厳しい冬の気候と積雪に耐え、商業的な栽培としては北限の村上茶。不利とされている日照時間の少なからタンニンの含有量が抑えられ、その味わいはやさしく、そしてまるやかな渋みの特徴です。

5月中旬からは茶摘みの季節です。茶かごを抱え、「茶摘み歌」を歌いながら新芽を摘む、かつての光景に思いを馳せながら、新茶を味わってみてはいかがでしょうか。